

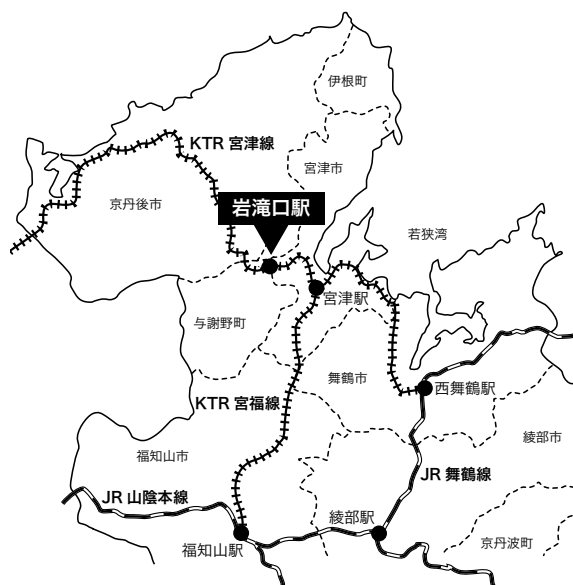
# 女性のバイタリティが地域を変える KTR岩滝口の草の根のコミュニティ活動 「ふれあいほっとさろん」

**安東直紀** 京都大学大学院工学研究科特定准教授

京都府宮津市は日本海に面し、日本三景のひとつ、天橋立がある地方都市である。城下町としての歴史も長く、かつては交易の要所として栄え好景気を謳歌し、「縞の財布が空になる」と歌われた時代もあった。しかし、現在では他の地方都市と同様、人口が減少する中で高齢化の進行に苦しんでいる。宮津市全体では2010年度の人口は19,599で、地方自治法に定められた市制要件である人口5万を大きく下回り、国内では16番目に人口の少ない市となっている。また高齢化率も32%で、全国平均を10%も上回っている、高齢過疎の地域である。

このような状況も一因となり、宮津市を通る北近畿タンゴ鉄道(KTR)は日本で最も赤字額が大きい第三セクター鉄道としても知られている。

宮津市吉津地区は、須津地区(人口1,426、平成22年度国勢調査)と天橋立のある文殊地区(人口316、平成22年度国勢調査)からなり、高齢化率が34.3%と高齢化の進行した過疎の集落である。須津地区にはKTR岩滝口駅があるが、国鉄時代から長らく無人駅で、現在でも1日に停車する列車は上下線合わせて普通列車35本のみであり、日中には乗り遅れると次の列車まで2時間以上待たなくてはならない時間帯もある。京都市中心部から辿り着くには特急を乗り継ぎ片道約2時間半かかる、そんな地域において、地域の婦人会が始めたコミュニティ活動が、地域を活性化させている例を紹介する[資料1]。



▶資料1 北近畿タンゴ鉄道 岩滝口駅

ほっとさろんの営業時間は、毎月第2日曜日の午前10時から午後3時  
(<http://www.city.miyazu.kyoto.jp/~kikaku/m/traffic/salon.htm>)

## 力を合わせたら、 何か出来るんとかうやろか

吉津婦人会(小谷久代会長)は2008年10月からKTR岩滝口駅舎を利用して毎月第2日曜日に「ふれあいほっとさろん」を開催している。筆者が取材に訪れた2012年4月8日は44回目の「ふれあいほっとさろん」開催日であった[資料2]。

毎月第2日曜に岩滝口駅の待合室で開催される「ふれあいほっとさろん」では、吉津婦人会の実行委員有志により手作りスイーツと飲み物をはじめ、いずれも手作りのお総菜やお



▶資料2 KTR岩滝口駅の「ふれあいほっとさろん」



▶資料3 手作りスイーツとコーヒー(200円)

やつ、小物などが販売され、同時に地元農家によるミニ野菜市なども開かれている[資料3]。月によっては地域にある趣味のサークルが発表会なども行っており、世代を超えた地域住民の交流の場となっている。

きっかけは、婦人会の旅行の帰りのバスの中で誰とはなく発した言葉であった。「このまま私たちが高齢者になった時、集まる場所もないと寂しいねえ。このメンバーが力を合わせたら、何か面白いことが出来るんとかがうやろか」。その時は皆が「そうだね」と答えるも誰も深く受け取らなかった。しかしこの話が、後日婦人会の別集まりで再び発せられた時、「それなら自分たちが出来ることを何かひとつやってみよう」と、当時の吉津婦人会の小室恵美子前会長が中心になり、プロジェクトが動き出した。2007年の6月のことであった。

### 成功させるには、あなたの協力が必要だ

そこからの小室恵美子前会長の行動力には敬服させられる。公民館の主事をされた経験もあり、組織運営のコツをよくご存じだったことがその行動力の裏付けとなったようだ。

小室前会長の頭の中にあった「ほっとさろん」のイメージを実現させるため、婦人会の会員から趣旨に賛同してくれそうな仲間を「成功させるためには、あなたの協力が必要だ。みんなで取り組みば絶対出来るから」と一本釣りで口説き、協力を取り付けた。その後に婦人会の総会で「交流事業をやりたい」と提案された時には「本当に出来るのか？」と不安がる人もいたそうだが、その時には既に実行可能な体制が出来上がっていたようだ[資料4]。

それから開催場所の選定が始まる。地域には空き家も多く、そこを利用する案も出された。しかし、無人駅となり落書きも多く荒れた岩滝口駅を開催場所とすることで、KTRの利用促進にも役立つかもしれないとの思いから、岩滝口駅の待合室を利用することとした。当時の岩滝口駅は建て替えられて15年が経過し、その間十分なメンテナンスも行われなかったことから雨漏りが酷い状況であった。

吉津婦人会からの「岩滝口駅を活用した賑わいづくりをしたい」との相談を受けた宮津市役所の担当者は、KTRの担当者と調整を行っている。KTRの駅舎を利用して継続的に地域の活動を行った例はそれ以前にはなく、「ふれあいほっとさろん」が最初だった。岩滝口駅を含めKTRの駅は住所地の自治



▶資料4 吉津婦人会「ふれあいほっとさろん」実行メンバーの皆さん(中央は小谷会長)

体の施設となっていて、通常第三者が駅の一部を使用する場合、所有者である自治体(この場合は宮津市)に対し行政財産使用料を負担する必要がある。しかし今回のケースでは福祉事業の一環で施設有効活用であると当時の担当者が判断。当初KTRと締結していた岩滝口駅の全体を使用する契約から、駅内の事務室をKTR使用範囲から外し、そこを婦人会が使用することとした。その上で婦人会に対しては事務室の使用料を免除することとした。

更に「ふれあいほっとさろん」開始に合わせ、宮津市は市の駅舎修繕予算の3分の1をかけ、岩滝口駅の雨漏り修繕、構内の化粧直しを行っている。その後も毎月1回定期的に駅舎を利用していることから落書きなどもなくなり、岩滝口駅周辺の美化にもつながっている。

### みんなで工夫しないと地域の活性化は出来ない

「ふれあいほっとさろん」自体は婦人会の有志が実行委員会という形で手弁当で行っているため、必要な備品等の購入もままならない状況だった。準備の段階でテーブルを探していた宮津市役所に相談したところ、市内の小学校で工作室の机が廃棄されることが分かった。そこでこの机を引き取り、現在でもテーブルとして使用している。実行委員会のメンバーの一人である黒岡さんは「私らが自分達で軽トラで取りに行ったんやで。昔の机は頑丈に出来てるから、今でも十分使えるわ。立派にリサイクル出来ているやろ」と笑顔で語っている。

しかし当初KTRの反応はつれないものだった。「待合室にテーブルを置いて、子供が乗って落ちてケガしたら誰が責任を取るのか？」日本中にあふれるこの発想は、決して地域の意気込みを応援するものではない。そこをどう乗り越えるか。



▶資料5 「ふれあいほっとさろん」での高齢者に対する交通安全啓発活動

「みんなで一緒に工夫しなければ高齢・過疎で苦しむ地域を活性化することは出来ない」と肝に銘じる必要があるのではないだろうか。「その後『ふれあいほっとさろん』の活動が盛んになるにつれ、現在ではKTRも協力してくれていますよ」とは小谷会長からのフォローである。

またKTRも岩滝口駅で開催される「ふれあいほっとさろん」の成功を受け、実際にその活動を評価。現在では但馬三江、丹後由良での第2第3の地域興しに協力をしているが、その先駆けとなったのは紛れもなく吉津婦人会の活動であったことは言うまでもない。

### 山田知事も KTR の お座敷列車で訪問

2007年から京都府が実施している地域力再生プロジェクト支援事業も追い風となった。2008、2009、2010年と同事業から支援を受け、食品を保管する冷蔵庫の購入などにあてる活動資金の一部を得ることが出来た。それをきっかけに「京都府の方には色々お世話になった(小谷会長)」と、京都府とのつながりも出来ることになる。

当時担当された京都府丹後広域振興局の芦田氏はその時のことをこう振り返る。「京都府では地域力再生プロジェクト支援事業として、多くの地域コミュニティに対し活動の支援をしてきました。吉津婦人会さんの取り組みは京都府としても課題であるKTRの利用促進にも役立つ企画でしたし、応援させて頂いていたんです。申請書の書き方なんかもコツがありますからね。そこはお手伝いさせてもらいました。その後も吉津婦人会さんはすごく良い取り組みをしてくれていて、丹後でも一番上手くいった例のひとつではないかと思っています。それもあって、知事表彰に推薦させてもらいました。」

小谷会長の言葉の通り、その後も吉津婦人会は京都府との関係を維持している。2011年の7月には山田啓二府知事が「知事と和い、和いミーティング」にKTRのお座敷列車で訪れ、住民と意見交換している。

### 知名度の高さを生かし、 乳がん検診や交通安全のPRも

「ふれあいほっとさろん」の第1回は2008年10月であったが、初回の来客数は80名以上であった。小室前会長によると当初は「コストを計算すると100人くらいのお客さんに来てもらえないかなあ」との目算であった。しかし「ほっとさろん」が終わった後、メンバーに当日の感想を聞くと「すごく楽しかった。充実した。またやりたい」との声

が上がり、これで「ふれあいほっとさろん」を継続させることが出来るかと確信したそうだ。

その後も「ふれあいほっとさろん」では毎月1回の開催で平均90～100名程度の乗客を集めている。その集客力を生かすべく、吉津地域を担当する保健所の保健婦が乳がん検診キャンペーンに訪れたり、交通安全協会から広報担当の方が来られ、高齢者向けの交通安全パンフレット配布などをされたりしており、地域の行政組織の間でも知名度は高い[資料5]。

この日「ふれあいほっとさろん」を訪れた与謝野町の交通安全協会のボランティアはこう言う。「この地域はご覧の通り、過疎化が進んどる。バスも走ってはいるけど、本数も系統も限られとる。買い物や病院など、どこかに行こうと思ったら、例え年寄りでも車を使わんとどこにも行けへん地域なんや。でも年寄りは若いものと違って、反応も鈍くなるし、気を付けない、事故を起こす。ひとたび事故が起こると本人だけでなく、家族や相手が不幸になるやろ。そうならんように、普段から気を付けてもらわんとあかんので、PRに回っているんや。ここは近所のお年寄りがたくさん来られるので、2か月に1回ぐらい来るようにしとるんや。まちづくりを勉強してはんなら、こんな地域をこの先どうしたらええか、是非考えてもらいたいね(笑)」。

### すごく楽しかった、 充実した、またやりたい

毎回100名からの参加者を集めていても、小谷会長は現状に満足していない。「『ほっとさろん』の話をする、まだまだ知らない人がいる。そういう人にもっと来てもらえるようにしたい。そして、もっと須津を元気にしたい」と小谷会長は言う。須津地区からだけではなく、KTR沿線にある高齢者福



▶資料6 大正琴の発表会

社施設の入居者で家族と共に「ふれあいほっとさろん」に来られる方もいるようだ。

「ふれあいほっとさろん」の活動はKTR沿線における地域活性化のモデルとなりつつある。宮津市企画総務室の増馬氏はこう言う。「KTR沿線でも吉津婦人会の取り組みは刺激になっています。KTR沿線で地域興しに取り組んでいる成功例は岩滝口駅の『ほっとさろん』と但馬三江駅の『駅そば ぼっぼや』ですね。他の地域でも吉津婦人会の活動を参考に地域興しに取り組むところがいくつか出てきました。ぜひ吉津婦会に続いて成功させて欲しいですね。」

吉津婦人会の取り組みの様子はいくつかの新聞で報道され、2011年1月にはテレビ番組「冬の日本列島 頑張る小さな鉄道 ふれあいの旅」の中でも取り上げられた。新聞記事やテレビを見て大阪や京都から「ふれあいほっとさろん」を訪れる人も出てきた。継続している小さな活動が、少しずつではあるが、反響を得るようになってきている。

この日は須津にある大正琴のサークルが「ふれあいほっとさろん」で「桜の下で大正琴演奏」と題して発表会を行った【資料6】。演奏するのは全員地域の愛好者だ。生憎日本海側でも今年は桜が遅れており、当日はまだ咲いていなかったが、メンバーがお揃いの衣装を着て懐メロや宮津節などアンコールまで11曲を披露した。「ほっとさろん」のメンバーも手を止めて演奏を聴き、中には演奏に合わせて宮津節を踊る人もいて会場は大いに盛り上がった。

### 「それぞれが出来ること」を大切に

小室前会長に活動を続けていくために気を付けていることは何かと聞いた。「『ほっとさろん』は自分たちの健康作りのためにやっているんです。こうやってみんなで活動することで、高齢者の引きこもりにならないように。その活動が地域やKTRのためになったらええなあと思ってやっています」。

小室前会長は続ける。「9人で始めた『ほっとさろん』も今ではメンバーが16人に増えて、みんながそれぞれ得意なことを

無理せんとやっています。お菓子を作るのが得意な人はお菓子を作る。お花が得意な人は飾り付けをする。そうやって、それぞれが出来ることをやっているの、全然大変じゃありませんよ。

この地域はお店も減って買い物ひとつとっても大変なんです。『ほっとさろん』では地元の農家さんにも野菜を販売してもらったり、お総菜を作って販売したりしてるんですけど、これがお年寄りに好評なんです。そやから月に2回やってくれと言われることもあるんですけど、それはやっぱりメンバーの負担が大きくなるので、月1回ぐらいが丁度ええんです。

私はそんなに大したことは出来ません。みんなが気持ちよく動けるか、見て気を配っているだけです。本当にいいメンバーに恵まれました。みんながいてくれたおかげで、こんな楽しい活動を続けられてるんです。会長が小谷さんに代わって、更にみんながまとまるようになりました。リーダーの個性って大事ですね」。

### 地域の人が支えあって暮らしてこそその安寧

順調に見える吉津婦人会の活動であるが、高齢過疎地がどこも抱える同じ問題が待ち受けている。小室前会長は言う。「やっぱり後継者は問題やねえ。今私たちが動いている間はいいけど、この動きを引き継いでくれる若い人がねえ。婦人会も一番若い人で48歳。大体みんな60歳を過ぎてから婦会に入ってくる。老人会(長寿会)は70歳以上やね。そやから早く若い人らが入ってくるのを待ってるんやけどね。若い人らには、私らが動けなくなって『ほっとさろん』を続けられなくなったら、自分たちで何か新しいことを考えてやんなよって言うてるんやけどね。同じことを続けんでもええからね」。

「今年スケジュール、あげるから、また遊びに来て下さいね」。小谷会長から帰り際にチラシをもらった。5月と10月に歌声サロン、6月は食品衛生展とミニバザー、7月はフラダンス発表会。8月は絵手紙展、12月はクリスマス、1月は小正月、2月はバレンタイン、3月はお雛様にちなんだイベントを行う。9月と11月も手作りの100円ショップを開催。「ふれあいほっとさろん」は今年も元気いっぱいである。地域の女性が主体的に動き、地域を元気にしている。その活動は周辺の見本となり、その輪を広げている。

この先、第2第3の「ほっとさろん」が各地で地域を元気にすることだろう。都会に比べて例え医療施設が見劣りし、公共交通も貧弱な高齢過疎地であったとしても、地域にすむ人々がお互いに支え合って暮らしている、そんな地域は十分に安寧であると言えるだろう。